

時は流れ、時代は移り変わるものであるがインターネットというフレームを通してみると、その流れの速さに驚愕せざるを得ない。黎明期から成熟期へとその流れは加速している。1995年、ウィンドウズ95が発売され時代はネットへ突入していった。最初のころは「繋がる」と言うことがどのようなことなのか実感することもなかった。通信料金を気にしながらインターネットサーフィンをした時代もあった。それが今は定額・高速・大容量である。驚くべきはそれだけではない。ケータイに代表されるモバイル通信の普及である。小学生までもがケータイで繋がることを当たり前のこととして生活している。もはやケータイなしでは生活に息苦しさをを感じるほどである。

さて、このような短辺急な流れが多く支流をつくり多くの問題を作り出していることが白書の章立てからも読み取れる。ネットを利用したビジネスモデルは未踏の大陸のごとく無限の可能性を秘めている。そしてネットそのものを生業とする新興のベンチャー企業群を生み出している。勝ち組企業はその強みを活かして更なるビジネスモデルを構築することが可能であり、ITビジネスのスパイラルを作り出している。最近のトピックスとしてはOpen IDがある。さまざまなコンテンツをシームレスに利用するのに必要な機能であるがIDを共有化できるグループにいればますますアクセスが増えるというスパイラルがある。

インターネットの最大の特徴は「バーチャル」であるということである。このバーチャルがもう一人の自分を作り出し、新たなコミュニティを作り出している。その代表格は3Dのメタバース「セカンドライフ」でありmixiを筆頭とする「SNS」であろう。私を感じるメタバースは「何をしたいのかわからない」「操作が思うように行かない」「デザインがいまいち」というものであり、時期尚早感とユーザビリティの改善が必要と思われる。このへんは白書の指摘事項でもある。

これだけインターネットが根深く生活にかかわってくると当然のことながら不正を働く輩もあとを絶たない。ネットワーク犯罪は過去五年間一貫して増加している。とくに不正アクセス認知件数は大幅増加している。その多くはフィッシングによるパスワード盗用であるという。筆者はスパムメールこそ多いもののフィッシングのメールは受信したことがない。フィッシングは偽サイトに誘導してパスワードを入力させ盗むというのが一般的であるが巧妙に仕組まれれば引っかけかかってしまうかも知れない。似たような正式のメールも数多く来るからである。私はまず、私の名前を宛名にしているかどうかを第一判断としている。だいたいフィッシングはこれで防げるはずだ。引っかけかかってしまうのはやはり脇が甘いと言わざるを得ない。インターネットは時空を越えたツールで非常に便利であるが注意深く利用する必要がある。つまり微妙なトレードオフのなかで成立しているのが現状であろう。そのためには情報漏えいを引き起こさないようしくみと行動の徹底、ゼロデイアタックが増大するコンピューターウイルスへの対応が必要である。白書では「怪しいサイトを開かないというだけではもはやウイルス攻撃を防げない状況になってきた」と指摘している。ウイルス関連情報の定期的チェックやアンチウイルスソフト、スパイウェア対策ソフトの適正な運用が必要になってくるであろう。

注意を喚起することといえばネット上のお作法、つまりネットリテラシーを無視するわけにはいかない。個人的な日記や備忘録に止まらず、ネットへの情報発信ともなれば衆知の目にとまることとなる。暴力沙汰や交通違反、軽犯罪を犯したものに執拗なまでのバッシングや晒し行為が横行する。ブログや掲示板への軽い気持ちでの書き込みが自分や相手に対して莫大な損失を与えかねないという意識はまだまだ希薄である。黎明期を過ぎても成熟期への到達はまだまだ先のような気もする。